

# アジア食学論壇の創立と追及

趙栄光\*

## 1. アジア食学論壇の創立と主旨

歴史的に中国は長い間、「食べること」に関する問題を抱え続けてきました。とりわけ、近代史における中国は「飢餓の郷」と呼ばれることもありました。1950～1960年代、私は、当時の多くの都市住民と同じように、飢餓や厳しい栄養不足の苦しみを耐え忍んでいました。また、中国の多くの農民たちのさらに厳しい惨状を知りました。そのため、私は家族や他人の「食べること」に関する問題に強く関心を持つてきました。それは、私が食学研究に注目してきた潜在的な動機であるかもしれません。そのあとの10年間に、中国の農村部に暮らしていた私にとって食事することは日々対応しなければならない現実でした。そして、80年代初期に、黒竜江省のある経済研究所の研究員として、私は部門経済の研究を始め、食糧の生産と供給、及び民衆の食卓と「食べること」などの関連する問題に関心を持ちました。その後、中国の大学で「飲食文化」「飲食民俗」や「食学典籍」などの課程を相次いで開設しました。創業の苦勞を味わいつつ、当時の中国に新たな分野を拓きました。

私は文学・歴史学・哲学、政治理論や経済商業などの分野に興味があり、長い間それらに関する授業を経験し、知識を蓄積してきました。そのため、私の食学に対する問題関心は、最初から歴史学の視点から始まり、国際的視野を持つてきました。実は、約百年間、中国大陸の学術研究は国際的研究成果を絶えず吸収することを前提に、展開・進展してきました。近代以来の食学研究はその最たるものです。中国大陸の食学研究は1980年代初期から始まり、日本と韓国より約20年遅れました。一方、日本や韓国、香港・台湾地域、欧米の学者は1960年代から中華食学の文化と歴史に関する研究を始めました。一步遅れをとった中国大陸の「烹飪文化」「餐飲文化」や「飲食文化」に関する研究者たちは、また国粹を「發揚」しようとする立場を持ち、科学性と厳肅な歴史的責任感に欠けています。そのため、「中国人の食学研究、そして私自身の食学研究は、歴史を探究し、世界に目を向け、あらゆる研究成果を取り入れながら、着実に進めるべきだ」と、私は強くこだわり続けてきました。

そこで、世界各国の食学研究者を集めて、互いに関心のある問題を検討することは、当然の課題となります。しかし、当時中国大陸での学術状況に即していえば、かかる大規模で厳肅な

---

\* 執筆者：趙栄光

所属/職位：浙江工商大学/教授

機関住所：中国浙江省杭州市下沙高教园区学正街18号

E-mail：zhaorongguang126@126.com

学会を開くことは、赤貧状態にある知識人にとって、まさに高嶺の花でした。

そんな時、時勢と人民の要望が見られるグローバル時代における食の生産と生活の発展が巨大な社会的ニーズを引き起こしました。「中国有話説（中国は世界に主張したい）」という人類食事歴史に関する博物館・現実博覧園が素晴らしい環境を提供してくれました。アジア食学論壇の開催は、そのような時代や社会に恵まれ、要求に応じることができました。幾多の困難がありました。第1回アジア食学論壇は2011年に順調に開催されました。アジア、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニアからの食学研究者が学会に集まり、時代に重要なテーマを検討しました。

世界各国の食学の専門家に学び、世界各国の食生産、食生活に関する知識と経験を勉強して、中国食学研究の科学的、かつ健全なる進歩を促すこと、そして食学という全人類共同の事業の発展に、華人の情熱と努力を寄与することこそ、アジア食学論壇が創立する主旨です。われわれが幾重の困難を克服し、今日まで発展しえた理由もそこにあります。

## 2. これまでの学会のテーマと運営

能力、精力及び学会の学術レベルなどの諸要素に対する考慮に基づきまして、アジア食学論壇は最初2年に1回開催すると予定しました。しかし、社会的ニーズに応えるために、われわれは年次大会として実行しなければなりません。これまで、中国国内の数多くの省、市、自治区、及び海外の複数の研究者は、アジア食学論壇を主催する意欲を示しました。

各回のアジア食学論壇においては、国際的視野に基づき、食事に関する話題・難点を取り上げ、テーマを決定しました。われわれは人類食生活と食文化の趨勢を展望し、理論的な思考を提示して展開し、それによって社会に積極的な影響を与えることを期待しています。そのような立場に基づいて、これまでのテーマは以下の通りに設定されました。2011年・（中国）杭州市での第1回は「留住祖先餐桌の記憶（祖先食卓の記憶を守る）」であり、2012年・（タイ）バンコクでの第2回は「調和文化、科技、産業（文化、科学技術、産業を調和する）」であり、2013年・（中国）紹興市での第3回は「健康与文明（健康と文明）」であり、2014年・（中国）西安市での第4回は「糸綫之路飲食文明（シルクロードの食文明）」であり、2015年・（中国）曲阜市での第5回は「夫礼之初、始諸飲食（礼の初めは飲食に始まる）」でした。そして、今回盛大に行なわれる（日本）京都・大阪での第6回は、「食文化の交流－過去・現在・未来：アジアにおける食文化のダイナミズムを交流という視点から解明する」のテーマを設けています。それらすべてのテーマは、国際的食学研究の最先端を代表しています。

アジア食学論壇は世界各国食学界同士によって成立した民間学術連合組織であり、読書人と学者たちのための自由でルーズな学術交流の場です。政治的な色に染まらず、政府からの支援も一切持っていません。すべての経済的支援は既往の大会の組織と運営に投げ込んできました。中国飲食文化研究所に所属する大会運営会のスタッフたちは、皆ボランティアです。一回目の

学会を順調に開催するために、私は自ら、「中国杭幫菜博物館（中国の杭州料理の博物館）」を企画した謝礼から、20万元を寄付しました。アジア食学論壇の維持はそのような経済的な苦境を乗り越えてきました。

バンコクで行われた2回目の学会以外、各回の論壇に関わるすべての事務作業は、中国飲食文化研究所所属の人々が担いました。すなわち、王斯（博士）、周鴻承（博士）、呉昊（博士）、鄭南（博士）、馬瓊（博士）、劉征宇（博士後期課程）、陸穎（博士後期課程）、鄭思陽、葉方舟、巫雲霞、呉曉雪、及び現在アメリカで留学中の客員研究員の葉俊士（博士後期課程）をはじめとする研究者たちです。彼らのような民族と人間の事業に責任感を持ち、学術事業に献身する若者の努力があればこそ、本会の運営を維持できてきたといえます。アジア食学論壇は、現在中国高等教育界と学界において、すでに一つの特殊事例、未来の希望を代表する一つの文化的現象となっています。この「アジア食学論壇現象」は国内外から高く評価されています。それは、われわれの若者に強い励ましを与えました。衆知を集めて有益な意見を広く吸収し、またはアジア食学論壇の国際性、先端性、公平性を示すため、われわれはアジア食学論壇学術委員会・常務委員会を成立しました。石毛直道先生、ニューマン先生やサバン先生のような国際的に著名な食学研究者からのご指導、関心、応援のおかげで、われわれは始終、敏感に思考し、常に情熱を保ちながら日々真剣に努力しています。

時下、中国政府の特定雑誌に対する厳しい統制によって、われわれが編集・出版してきた雑誌『飲食文化研究』がやむを得ず中止することになってしまいました。しかし、われわれは『楚雄師範学院学報』で国際的・先端的・高い学術水準の有する論文を掲載する「食の研究」という新たなコラムを設けて、現在まで、40期を連載し、百何十篇の論文を掲載してきました。同じくわれわれが支えている『南寧職業技術学院学報』での「飲食文化研究」のコラムは、12年間連載し、そこで600篇あまりの論文を掲載しました。同時に、われわれはインターネットを活用し、食学研究に関する情報と思想を広げています。

### 3. われわれの学術主張

「文化に根があり、文明に境なし」は第4回アジア食学論壇のテーマです。それはわれわれの「シルクロード」の精神と歴史的意義に対する理解であり、われわれの学術主張に基本的な原則です。われわれは多様な文化を尊重します。どの民族でも自らの特有な食文化を持っており、文化的独自の創造があります。いずれも人類の大きな食卓に欠かせない一部分です。全世界の食学研究者・同士、この事業に熱心する方々は、皆人類という大きな家族に関心を持っています。われわれはいかなる建設的意見を感謝・期待し、同時にいかなる批評と異議も受け入れます。われわれは人類の食事に関するすべての有意義な問題に注目しています。特に民衆の小食卓－大食卓にかかわる重大な問題に関心を持っています。今後の食学研究のより深く進め、

自由で民主的な方向へ発展することを期待しています。

#### 4. 期待, 成果と希望

われわれはアジア食学論壇がより良く進められ、長く続けられることを望んでいます。さらに、より動員力、凝固力のある国際的食学組織に成長することを期待しています。それによって、われわれは全人類の健康で幸せな、かつ進歩的な食生活に貢献を尽くし、われわれの世代と以降の無数代の公共知識人の歴史的責任を背負うことができます。

われわれは「中華食学基金会」が早めに創立されることを期待しております。今は、本人の拙作と書道作品をバザーで販売することで、資金を集めようとしています。必要な資金支援があればこそ、本学会のより有効的、規範的、継続的な運営が維持できます。さらに、若手の食学研究により安定した、秩序のある有力な支援を提供することができます。

アジア食学論壇は国際食学界の同僚の精神の故郷になりつつあります。しかし、現在の規模はまだ足りないと思っております。われわれはより多くの国からの学者と緊密に交流し、討論することを望んでおります。この学会の名前は「アジア」になっていますが、われわれの心理、思想、視野にはそのような地域的な限界がありません。われわれはアジアに立脚して世界を見て、全人類と現時点の世界の「大食卓」に関心を持っています。

全世界の食学研究同士の努力のおかげで、われわれはすでにある程度研究成果を出しています。しかし、われわれが期待していることがまだまだたくさんあります。それは、食学研究の成果をまとめて検討すること、価値のある研究テーマを提示すること、食学に関する優れた著作を計画的に多言語に翻訳すること、食学に関する多言語な定期行物を出版すること、多種多様な学術的交流を促すことなどです。

古稀になった私は、これらの目標が実現することをもう待てないかもしれません。しかし、人類の文明は、次々と後から続き、先人を乗り越えていきます。一人ひとりの努力は一個一個の煉瓦であり、一世代一世代の努力は、一段一段の階段です。ローマは一日にして成らず、日々で構築されてきました。今日こそ新しい一日です。非常に意義のある一日です。

(劉征宇 殷曉星 訳)